

撮影:駒優梨香

『風景によせて 2021 かわのうち あわい』 レポート

目次

- 1. ご挨拶
- 2. 上演記録
- 3. 『かわのうち あわい』ができるまで
- 4. 関連グッズの制作
- 5. アーカイブと「プロセス便」
- 6. 滞在制作を振り返って(コメント)
- 7. 【劇評】ソノノチ公演に寄せて/「まれびと」としてのソノノチ
- 8. 『風景演劇』プロジェクトとは
- 9. ソノノチとは

1. ご挨拶

『風景によせて 2021 かわのうち あわい』は、「風景演劇プロジェクト」の取り組みをはじめてから4年目の作品です。この作品は元々、昨年 9 月に上演予定でしたが、新型コロナウイルスの影響で滞在と上演の両方が延期となり、2022 年 3 月に様々な調整を経て、ようやく上演にこぎつけました。(延期になった一連のプロセスも作品の大切なあゆみのひとつなので、タイトルは「2021」のままにしています。)

半年以上の月日があいた後、再びメンバーと東温市を訪れました。久しぶりに屋外の気候や景色の変化を通して、延期が決まった夏から数えて、実に半年以上経っていましたが、様々な調整のおかげで再び戻ってくることができました。改めて挨拶回りをした際、地域の方々に「やっと上演できるんですね。」「待ってたよ、頑張ってね!」とたくさん温かいお声がけをいただきました。これまで長い時間をかけて準備してきたことが、きっとこれから少しずつ花開いてゆく。そんなありがたい心地がしました。そしてそのイメージは、雪解けを迎え春へと向かう会場の風景とも重なります。また他にも、地域のコミュニティスペースをお借りして、関連企画である「もうすぐ展」を開催しました。これは創作過程を展示で紹介するもので、まだ私たちの作品を観たことがない方にもイメージを持っていただくために、これまでアーカイブしてきた映像・写真・テキストを再構成しているものです。

その場所に、たしかにいた人たち。そこで暮らしてきた人たち。風景は彼らの日々の営み、 その時間の蓄積です。風景の中に立つことで、その足跡をたどることができるかもしれませ ん。また、主観で切り取られる風景はダイレクトに、私たちに問いかける力を持っているよ うに感じます。「今あなたは、一体どこに立っているのか」と。

コロナの複雑な状況の中上演を受け入れて下さった地域の皆さま、様々な調整を続けて下さった東温市関係者の皆さま、また関連団体・個人の皆さまに、心よりお礼を申し上げます。 多くの物語や歴史的背景を持つ、河之内の風景に心を惹かれてから早1年。ようやく本番の 上演を行えたことは、本当に嬉しいことです。

本番の日、待ち構えていたかのように桜が一斉に開花しました。春は毎年やってきますが、 同じ春はこれまでもひとつとしてなかったはずです。たった一度しかない、きっと忘れるこ とのできないだろう春を、大切に味わうことのできた貴重な時間です。

まだ見ぬ風景によせて。

ソノノチ 中谷和代

2. 上演記録

▼『かわのうち あわい』基本情報



とうおんアートヴィレッジフェスティバル 2021 参加作品

『風景によせて 2021 かわのうち あわい』

日時: 2022年3月26日(土):27日(日)

各日①11:00-/②17:00- 開演

場所:惣河内神社 及び その周辺 (東温市河之内甲 4876)

構成・演出:中谷和代

出演: 芦谷康介、桐子カヲル、筒井茄奈子、藤原美保、脇田友

演出部:北方こだち / 楽曲制作:瀬乃一郎 (廃墟文藝部) / 衣装:たかつかな (何色何番) / 舞台監督:脇田友 (スピカ) /

宣伝美術:ほっかいゆrゐこ/イラスト:森岡りえ子/

制作:渡邉裕史 / 制作補佐:小寺春翔、藤田みのり / アーカイブ:柴田惇朗

協力: 東温アートヴィレッジセンター、とうおんアート・ラボ、河之内分館、惣河内神

社、金毘羅寺、一般社団法人フリンジシアターアソシエーション、日向花愛、大岩主弥、

コキカル、サファリ・P、スピカ、何色何番、廃墟文藝部、日置あつし、駒優梨香、

池内宗基、大沼花依、古家誠、雨瀧屋、近藤家、人空田、ぼたん茶屋、滑川清流クラブ、

駅と珈琲、多世代交流拠点利用者協議会 ekit(横河原ぷらっと HOME)、

松山ブンカ・ラボ、原泉アートプロジェクト、東温市地域おこし協力隊の皆さま

企画制作: NPO 法人シアターネットワークえひめ

共催:東温市 主催:東温市移住定住促進協議会

助成:令和3年度文化庁文化芸術創造拠点形成事業 supported by KAIKA

▼観覧者数

延べ 165 名

3月26日(土) 合計35名

(1回目: 荒天のため中止/2回目: 35名)

3月27日(日) 合計130名

(3回目:78人/4回目:52人)

※荒天中止の回、「惣河内神社そばの無料休憩所(河之内公民館)にて、ソノノチメンバーが今回の滞在制作と風景演劇作品についておしゃべりする回」をインスタライブにて配信。 視聴者数 66 名。

▼上演会場の様子

本上演の受付場所でもあった惣河内神社前では、地域の方々による複数の出店のご協力を頂き、周辺に賑わいが生まれていた。

・受付付近には、神社の宮司さんによる「つぼ焼きいも・冷やし焼きいも」の出店と、東温市観光大使の方による東温市の観光案内ブースを設けた。 (※写真下)





- ・神社のすぐそばにある公民館を活用して、雨天時や早めに到着された方への待合所、 及びこれまでの滞在期間に作成した記録資料や広報物などの展示を行った。 雨天時はここに物販のブースを設け、オリジナル関連グッズの販売を行った。
- ・上演会場内では、横河原にあるコーヒーと古本のお店「駅と珈琲」さんの飲食出店を行った。 コーヒー豆は季節に合わせたものを焙煎所から 仕入れて、ビスコッティと合わせて会場内で 気軽に楽しめるようになっている。(※写真右)
- ・上演終了後には、上演の舞台となった棚田の 風景の中を、観客が今度はパフォーマー側の 視点に立って歩く「風景散歩」を企画した。 終演後に、希望者のみ参加する形態で、延べ 47名が参加した。



▼『風景によせて 2021 かわのうち あわい』鑑賞者の声(抜粋)

自然の中に吸い込まれていくような美しい 時間。変わるもの、受け継がれるもの。そ して地域に溶け込んでいく感覚。

天界を目の当たりにしているような不思議な感覚と緊張感がありながら、時折耳に入ってくる、鳥のさえずりや川の流れる音、風音にふと現実に戻されたり…ソノノチさんの 言われる「緑のまどろみの中」に、私も居た。優しい音楽、心地よい音色と共に、河之内の美しい棚田の中に佇む姿に心打たれ、なぜか、泣けた。最後は、地上に降りてきたのか、現代に近づいてきたのか…何かが胸に残り、何かを考えさせ、そして、何も考えられなくなる、ただ余韻に浸っている今。観ないと分からない。観たら、絶対に残るものがある。



撮影:駒優梨香、現像:脇田友

台詞はないのだけれど大きな自然の中でゆったりと人が動く。人の営みって本来そういうものだったのかな、僕たちは今せかせかと生きてるんだなと想う。その場でしか味わえないとても豊かな体験でした。

ステージになった場所のお散歩のとき、都会から来たという若い女の子 2 人組が「こんなと ころに住みたいなぁ」って言ってて、このイベントの成功シーンだなとおもった。

夕日の中での惣河内神社での神秘さ、棚田での伊吹が芽生えるかのような美しさ。風景演劇ならではの地域と人とのつながりを感じるひととき。

演者も、その土地に生きているものたちの音も、気配も、風も、光も、音楽も。 すべてが心地よく組み合わさっていて、やわらかな春の恵みを分けてもらったような気持ち になりました。

3. 『かわのうち あわい』ができるまで

▼会場について

『かわのうち あわい』は愛媛県東温 市河之内の惣河内神社(そうこうちじんじゃ)、及びその周辺の棚田の風景 で行われた。惣河内神社は河之内の総 鎮守として 803 年に創立され、以来 河之内地域にとって重要な信仰の拠点 となっている。

本作品では本殿から延びる階段を下り、鳥居を通って境内を出た後、その



まま真っすぐ向かった先にある丘の頂上に向かう。この丘の上にあるのが「御旅所」(おたびしょ)である。ここは神社の祭礼のとき、神輿がとどまるところで、本殿、鳥居、御旅所が直線状に並ぶことでそこは神様の通り道となる。風景の中には他にも川や、かつて雨乞いが行われた滝、春を待つ田畑があり、人々の生活と信仰が自然の中で育まれてきた一端を感じることができる。 参考: 愛媛神社庁 http://ehime-jinjacho.jp/jinja/?p=4828

▼創作スケジュール(2021~2022年)

	2021									2022		
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
現地コーディネーターとの オンラインセッション	in a second								1			
アートディレクションミーティングでの オンラインセッション									***************************************			
滞在制作:計5回、36日間の滞在					中止	中止						
京都での稽古・ミーティング												
上演会場 (惣河内神社 及び その周辺) 決定												
上演 3月26日 · 27日												上演
『風景によせて2021 かわのうち あわい』 もうすぐ展 準備 会期:3月3日~31日									11			会期

4. 関連グッズの制作

ソノノチは物販部「ソノノチノチ」として公演ごとにオリジナルグッズの製作を行っている。『かわのうち あわい』に合わせては次のグッズが制作された。



●ポストカード

上演場所となる惣河内神社の境内と河之内の棚田をモチーフに、描き下ろしのオリジナルイラストを使用。色が溶け合い、混ざり合う「あわい」を表現している。2 枚セットで販売。



● 『風景によせて』旅するボトル

ソノノチが上演してきた風景演劇のあゆみをマグボトルにしたもの。これまで訪れた原泉(静岡県)、質美(京都府)、河之内(愛媛県)それぞれのモチーフをあしらっている。白いボディにネイビーのプリント、キャップは木目調。白いキャップの数量限定バージョンもある。



●【プロセス便】『風景によせて 2021 かわのうち あわい』上演台本

創作の過程(プロセス)を別作品としてアウトプットする取り組みの第三弾。上演の瞬間に起こっていたことを、パフォーマーの演技やまわりの環境の様々な状況まで、膨大な記録から編集・書き起こし、上演台本をつくるという試み。5月末頃完成、データで送付の予定。



撮影:駒優梨香

5. アーカイブと「プロセス便」



ソノノチでは『風景演劇プロジェクト』と並行し、創作過程のアーカイブやアウト プットにも積極的に取り組んでいる。今回 『かわのうち あわい』での制作プロセスは、 「プロセス便・上演台本」(前ページ:グ ッズ紹介欄を参照)と「もうすぐ展(展 示)」という形式でアーカイブしている。



「もうすぐ展」は 2022 年 3 月 3 日(木)~31 日(木)、東温市内にある〈横河原ぷらっとHOME〉にて開催。『かわのうち あわい』本番に向けた、約1年に及ぶ滞在制作の映像や写真の記録を展示した。

(写真上:もうすぐ展 DM ハガキ)

(写真下:展示の様子)

<これまでの制作物>

『風景によせて 2020-2021』

- ・「つくる・くらす・あそぶ アーカイブ」キーワードカード集
- ・創作プロセス/上演映像

『風景によせて 2021 はらいずみ もやい』

・プロセス便(ストリーミング映像とデジタル文書のセット)

〈展示〉

・ソノノチ展『風景によせて 2021 えんをめぐる』





6. 滞在制作を振り返って

田中直樹(東温市地域おこし協力隊)

アーティストがその地で暮らし・創り・作品を生み出す滞在制作は、愛媛県東温市が、今からおよそ 5 年前に掲げた文化芸術を通したまちづくり「アートヴィレッジとうおん構想」における大きな柱でありながら、未だ実現できていなかった取り組みの一つでした。

2020 年の夏頃に、東温市のような自然と調和した環境で創作をすることに深い理解と経験を持たれるソノノチの皆さんにご相談をし、東温市で初となる滞在制作をソノノチの皆さんとともに1年間の月日をかけて実現することができました。

クリエイションを通して、地域の中にアーティストが入ってくることへの住民の方々の理解を得ることができたとともに、住民とアーティスト、文化芸術との距離間をより縮めることができるなど、今回の滞在制作は、構想がはじまって以来の東温市における舞台芸術シーンに大きな影響を与えたことは間違いありません。作品そのものに関しても、東温で暮らす人々やその営み、風土や土地そのものを尊重し、そこから影響を受けて生み出されたパフォーマンスと創作の風景からは、まさに"人の暮らし"や、古来より続く"地域文化の起こり"のようなものを感じ取りました。

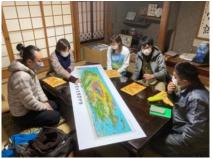
上演当日には東温に住む方々はもちろん、市外、県外からも多くの方々に来訪していただき、東温の風景に新しい風が訪れた瞬間に立ち会っていただけたように思います。













7. 【劇評 1】ソノノチ公演に寄せて

――ソノノチ『風景によせて 2021 かわのうち あわい』評

徳永高志 (NPO 法人クオリティアンドコミュニケーションオブアーツ代表)

公演を月並みな言葉で表現すれば、「アートインレジデンス」と「サイトスペシフィック」ということになろう。「アートインレジデンス」は全国各地でおこなわれているが、それを引き受ける側が大きな公的施設・組織でない場合、様々な困難がともなう。宿泊先や練習場、食事の手配から、長期間にわたる場合はメンバーのコンディションや天災等々、枚挙にいとまがない。そもそも、多額の費用がかかる。ましてや現在のコロナ禍で手間は倍加している。今回も、大幅な延期のうえ、荒天で初日午前の公演が中止になった。

そうまでして、「アートインレジデンス」を実施する意味はどこにあるのか。第一の目的は、アートにしかできない交流であろう。アーティストは地域の人々と生活を通して交流し、地域の人々の営みからさまざまな価値を吸収する。地域の人々は、日常にない言わば異物を受け入れ、常とは異なる世界観を眼前にする。それは、座学では体得できないアートならではの化学反応を引きおこす。今回は、地域の人々が神社と棚田という祈りと生産の場を会場として提供し、パフォーマンスを許した。「とうおんアートラボ」のメンバーを中心にボランティアで炊き出しをおこない、当日は多くの近隣住民が来場した。会場では、「わざわざ京都から来たんだって」「やっぱり若い人たちのやることにはついていけない」「これはお芝居なんだろうか」等々、さまざまな声が聞こえてきたが、彼らの公演中の集中は、異物を真剣に受け止めた証でもあった。

第二は、その場所でしか生まれ得ない作品そのものの価値である。これは、「風景演劇」を志す「ソノノチ」の独壇場であった。まず、ここにしかない場所の発見、そして、その祈りと生産の場の意味を彼らの視点で掘り下げ、美しい作品が紡がれた。それは、そのまま「サイトスペシフィック」にもつながるもので、地元の人々にとっては当たり前の景色が、貴いものに変容する瞬間が生み出されていた。市外からの鑑賞者である私も、この集落をもっと知りたくなり、終演後、近隣の「雨滝」を訪ねた。雨乞いをしたという由来を学び水音に浸る一方、休憩所の公民館に掲示されている子供たちが作成した南海大地震発生時の被害予想と避難方法のポスターに見入る自分がいた。この美しい場所が中央構造線のほぼ真上にあることを知り、はからずも、人が生きることの意味と困難さに思いをはせたのである。

アートインレジデンスの成果を十分に感じた一方で、作品には若干の不満がのこる。 彼らが、パフォーマーとして十分に研ぎ澄まされた身体を持ち、場所を知り丁寧な作品作りを心掛けていることが理解できるからこそ、細かいことが気になる。

まず、神社での宗教性を帯びたパフォーマンスにおける衣装の足元である。色には留意されてはいたが、靴ではなく足袋や裸足ではいけなかったのか。観客の至近で演じられることもあり目が向いてしま

う。次に、第一会場(神社)から第二会場(棚田)への移動方法である。日常と変わらぬ移動は、パフォーマンスの世界から否応なしに現実に引き戻され、意識は分断される。これは野外公演につきものの安全管理と作品作りのせめぎあいの結果であろうが、作品に沿った手法で案内し、移動することは不可能だったのか。そして、風景と来場者の多くが経験してきたであろう感情に寄り添いすぎる音楽である。これは、「その後(のち)、観た人を幸せな心地にする作品をつくる」というアーティストグループ創設時の理念に沿ったものだとも言えようが、この作品でしか得られない感銘とは少し距離があると感じた。最後の、終演時の一礼で、私たちの意識はまたも分断され、「そののち」に思いをはせる機会を失う。静かに姿を消すなど、もっと演劇的な終わり方はできなかったのか。無言ですすめられるので、なおさらである。おそらくは、日ごろパフォーミングアーツを観慣れない受け手に対するサービスもあったろう。そのことは、観足りない、もっと観たいという意識をネガティブなことと感じてしまう一因になってもいると言えまいか。

幾重にも困難な状況のなかで、演劇の美質を存分に感じさせてくれただけに、無いものねだりの贅沢 な要求をしてしまう。

それゆえに、もう一度この地で、また他の地で、紡ぎだされた作品を観たいと思う。



【劇評2】ソノノチ公演に寄せて

――ソノノチ『風景によせて 2021 かわのうち あわい』評

高畠麻子(高畠華宵大正ロマン館主任学芸員、とうおんアート・ラボ副代表)

私は普段は東温市にある高畠華宵大正ロマン館という美術館で学芸員として働きながら、「とうおんアート・ラボ」(以下、アート・ラボ)という東温市の歴史・文化・アートに関わる活動をする市民グループに所属している。アート・ラボとソノノチが最初に出会ったのは、2021年6月21日(月)の夜。アート・ラボのメンバーでもあり、今回のソノノチ 風景演劇の影の立役者でもある東温市地域おこし協力隊員の田中直樹さんから急な呼び出しから始まった。

アート・ラボは、東温市が 2017 年から「アートヴィレッジとうおん構想」を掲げてから、その方針 や内容に何となくワクワク・モヤモヤしていた市民が、何となく集まって始まったグループだ。文化政 策の勉強会をやったり、コロナ禍でのアーティスト紹介の動画を作ったり、コロナで中止となった獅子 舞芸能についての展覧会を企画したり、アートヴィレッジという看板が掲げ続けられるよう、市民目線 で東温市を見つめ、紹介してきた。偉そうに言えば「中間支援」的な立ち位置で、市民が自律的にアートヴィレッジに関わる方法を現在も模索している。そんな活動の中で見えてきたのは、「アート」という言葉で括られる一過性的な(ものが多い)現代の表現行為と、東温市という地域やそこに生きた人々 が長い時間をかけて紡いできた行為(祭礼、風習、景観など)を、それぞれ異質の行為と考えてしまうと、本当のアートヴィレッジは誕生・成立しないのではないかということである。

たくさんのアートイベントが行われることだけがアートヴィレッジ構想の目的ではないであろう。普段はアートに関わっていなかった市民が、何かのきっかけで地域の歴史や文化の営みに目を向け、文化の継承・破壊・創造という行為に意識を向けること、そしてそのきっかけがアート表現でありアート鑑賞であることが、アートヴィレッジを構想する原理であるべきである。

と、偉そうに書いてきたが、実際のところ、2021 年のアート・ラボは行き詰まっていた。勉強会、動画配信、展示企画など色々なイベントや活動を行なっては来たが、それがどこに行くものなのか、何とつながるものなのかがいまひとつ判然とせず、アート・ラボとしての活動の根幹や方針をもう一度考え直す時期に来ていた(と個人的には感じていた)。実のところ、アートヴィレッジ構想というあやふやな言葉や現実に少々嫌気がさしていた私は、6 月 21 日のソノノチとの初顔合わせの日、そんな日頃の迷いや不平不満を口にしていたのであった。

複数回にわたる滞在中、ソノノチの人々が何を見て、誰と話し、何を思い、どのように作品が作られていったのかは全く知らない。しかし公演直前の約 10 日にわたる滞在中(私は食事作りに何度か顔を出すだけであったが)、彼らの熱量が変わっていくのが感じられた。山奥の集会所で滞在・制作をしながら、日々現場に向かい、帰ってきてはプランを練り直す、そんな作業の連続だったのであろう。彼ら自身が東温市の山里の風景に馴染んでくるにしたがい、地域の人々や風土もまた彼らを受け入れていった。ソノノチは、合計 3 回の公演を見た人々の心に様々な思いを呼び覚まし、そして去っていった。

そんなソノノチの存在を、ここでは「まれびと」と重ねてみたい。よく知られているように「まれびと」とは民俗学者・折口信夫が古代の来訪神の存在を説明するために昭和 4 年に唱えた概念である。そもそも日本には、村の共同体の外(異界)から来る客をもてなす風習があり、この異人を神または霊的な存在として信仰していたという。「まれびと」は一年のうちある一定期間、村に滞在し、村人を祝福し、共同体に活力を与える。その言葉は文学となり、その舞は芸能として共同体に浸透していったという。やがて神だけではなく、各地を移住する芸能者や遊行者までもが「まれびと」として歓待されるようになったと言われている。

ソノノチをいわゆる民俗学的な意味での「まれびと」と同一視するのは無理があるが、しかし彼らの取り組み、つまり「外界から訪れ」「村に滞在し」「村人と交流(村人が歓待)し」「芸能によって共同体に新しい活力を与える」という行為は、古来より「まれびと」がなし得たそれと重なる。何よりソノノチの公演が惣河内神社から始まり、村の集落全体が見渡せる場所へと広がっていったということが、ソノノチと「まれびと」の相似性を連想させる象徴的な事象に思えるのだ。

ソノノチによる滞在型制作という試みをこれほど大仰にとらえたくなるのは、私がアート・ラボの活動を通じて感じてきたことと無関係ではない。前述のように地域にアートが根付いていくためには、一方通行的な興行だけでは不可能である。地域が持つ文化的資源(財産)に自覚的になり、それを市民が享受し、次世代へとつなげるためには、常に新しい価値観と対峙し続ける必要がある。歌舞伎や能などの伝統芸能や、各地の祭礼や地域芸能などの例を挙げるまでもなく、文化は常に変化し続ける。そのために必要なものの一つが「アート」的な行為、つまり新しい価値観への気づきを促す表現と場の創造と考える。

ソノノチの来訪が東温市に残したもの、「まれびと」が見せた風景をどのように文化として継承していくのか、私たちには大きな課題が与えられた。それを心に刻みながら、「まれびと」の再訪を願わずにはいられない。



8. 「風景演劇」プロジェクトとは

▼「風景演劇」について

「風景演劇」とはソノノチが近年つくりあげてきた独自の上演様式である。言葉の定義として「景色」は主に自然の要素のみで構成されたものを指すことが多いのに対し、「風景」は主観的(私的)であることに加え自然の中に街並みや人の営みが入ったものを指すと言われている。ソノノチはこの風景の主観性に注目し、鑑賞者が人物(パフォーマー)だけでなく自然、そして建物などの人工物も含めた風景を眺めるように鑑賞できるよう、視野を開き、風景に馴染む作品を制作し、風景の中で上演してきた。

鑑賞者は風景演劇を通してその風景がその瞬間その場所にしかないという事実(風景の唯一性)にふれ、風景が立ち上がる瞬間に立ち会い、それを構成するあらゆるものと居合わせることになる。この経験は鑑賞者自身の唯一性への気づきと「自分らしい時間の流れ」の回復につながることが期待されている。

▼上演映像

『風景によせて 2020』 上演映像: 望遠版



ダイジェスト版



『風景によせて 2021』 上演映像: 風景での上演映像







撮影:脇田友

▼これまでの『風景によせて』

『風景によせて 2021』



上演場所:旧質美小学校(質美笑楽講) (京都府船井郡京丹波町質美上野43) 中庭、および小学校の外に広がる風景

上演日:

2021年2月27日(土) · 28日(日)

上演時間(各15分):

14:30~(中庭パフォーマンス)

15:30~(中庭パフォーマンス)

16:30~(屋外パフォーマンス)

(両日とも同内容)

『風景によせて 2021 はらいずみ もやい』



「原泉アートデイズ!2021 〜相互作用〜」 内で上演した屋外パフォーマンス

上演場所:泉公会堂付近

(静岡県掛川市黒俣62周辺)

上演日:

2020年11月20日(土)・11月21日(日)

上演時間(各30分間):

11:45~ 15:30~ の2回(両日とも)

撮影:脇田友



「『風景によせて 2020-2021』レポート」も合わせてご覧ください(QR コード)

9. ソノノチとは



京都を拠点とするパフォーミング・アート グループ。2013 年 1 月より活動を開始。ユニット名は、「その後(のち)、観た人を幸せな心地にする作品をつくる」という創作のコンセプトにちなんでいる。近年は、空間そのものを作品として捉えるインスタレーションの手法を用い、劇場だけでなく、ギャラリーやカフェ等での上演を行ったり、絵画や音楽など、他ジャンルのアーティストとのコラボレーションも行う。主なメンバーは、中谷和代(演出家・劇作家)、藤原美保(俳優)、渡邉裕史(制作)。











中谷和代

1985年生まれ。演出家、劇作家、俳優。ソノノチ代表。 ソノノチの本公演のほか、ミュージカル、市民劇、音楽コンサートな どの演出も手がける。劇作の他にはワークショップデザイナー、イベ ントディレクターとして活動。2012年頃から演劇教育に興味をも ち、演劇ワークショップの効果測定プロジェクトへ参画。ほかにも文 化庁、文科省の学校派遣事業や、高校・大学の講師業などを通して、 人材育成に取り組む。2014年~2020年 NPO 法人京都舞台芸術協会 理事。現在、日本演出家協会員/日本劇作家協会員。